

満洲唱歌に見る満洲の原風景

—消えゆく唱歌を惜しんで

藤川琢馬（会員）

1 はじめに

「まちぼうけ」や「ペチカ」は満洲唱歌だった、という書き出しで始まる喜多由浩著『満洲唱歌よ、もう一度』が出版されたのはちょうど20年前であった。終戦時、在満日本人学校の児童だった人たちは当時60歳代で、彼らは活発な同窓会活動を通じて満洲の思い出を語った。年に一度の集まりで、懐かしい母校の校歌に声を合わせ、顔を見合わせながら満洲唱歌を歌うこの場は、大きな喜びであった。それは彼らの文集作りと同様、唱歌に付随するそれぞ

れの思い出や暮らしてきた証しが、また時代とところを共有した仲間意識など、歌が作り出すことのできる共通の思いと感情が、歌うことによって確認し合えたからである。

わたし自身は引揚げまで7年間の在満で、しかも敗戦混乱時の就学では、唱歌の教科などあったかどうかの記憶もなく、満洲の同窓会もない。しかし、諸先輩方が愛唱するいくつもの満洲唱歌を歌っているうちに、いつしか満洲唱歌に愛着を覚えるようになった。唱歌を通じて、自らの生まれ育ったところに触れたいという思いがあったのだろう。

北原白秋、山田耕筰による先の2曲は、大正13（1924）年に発行された在満日本人児童のための『満洲唱歌集 尋常科第一・二学年用』に収載された唱歌である。すなわち満洲唱歌は、大正末期に児童の教科に導入され、以来、終戦に至るまで児童たちに歌い継がれ、親しまれてきた。これら2曲はその後の教科書改訂で姿を消したが、知らない人はいない日本の童謡に生まれ変わり、代わりに在満児童にはより満洲の風土に根差した唱歌が与えられ、児童たちは愛唱した。

喜多著はそのタイトルにあるように、「満洲唱歌を忘却の彼方へと追いやっ

てはならない：さまざまな人たちの思いが込められた歌の数々を、次代に伝えたい」と願ったものだった。しかし発行されて20年、かつての在満児童は80歳代になるとともに次第にその数を失い、同窓会や満洲関係団体の解散も相次ぎ、今や満洲唱歌を歌う機会も場もほとんどなくなってしまった。喜多の願いも空しく、人々と関係する唱歌が消えゆき、唱歌とともにある思い出が消え去り、満洲唱歌は、楽譜や音源などの記録媒体に保存されるだけの存在になってしまった。いかんともしがたい時の流れに抗うことはできないが、わたしは、わずかでも満洲唱歌の記憶をとどめておきたいと思っている。

満洲について、文字、写真、画集、絵はがきなどを通じて知ると同じように、満洲唱歌を通じて知るところ感じるどころがあるに違いない。あるいは、唱歌だからこそ感じられる面があるのではなからうか。また、満洲唱歌に表現されているふるさとの風景は、日本人の在満児童だけのものではない。満洲の児童にとってもその風景は同じ

く存在した。

多くの満洲唱歌には、その歌詞に満洲特有の風物が表現され、満洲色を主張するが故に満洲っ子が親しみ、のちのちまで愛唱された。彼らが最も愛唱した唱歌「わたしたち」には、北風、雪、リンク、スケートあそびなど満洲ならではの歌詞があるだけでなく、直接的な表現へまんしうそだちの わたしたちがあって、これでは学校の校歌と同然、満洲っ子だけの歌である。「たかあしをどり」も「娘々祭」も現

地の習俗が題材で、内地の子どもには馴染むことができない。満洲唱歌には、歌詞だけでなくメロディーやリズムにも土地の匂いがある、と前掲書に記されているが、この点についても後ほど考察してみたい。

2 満洲唱歌に表れる風物

2・1 赤い夕日と広野の「コウリヤン」

満洲唱歌に描かれた満洲の風物は、風景であれば確かに存在した風景であった。しかし今、現実の世界では存在し

なくなっているかもしれない。たとえば赤い夕日と地平線の果てまで広がるコウリヤン畑は、最も強い印象を与える満洲の景色だが、その景色は今でもあるだろうか。近年その表現を目や耳にすることがないように思える。夕日の色や大きさ・位置は変わらなくても、コウリヤン畑には別の作物が栽培され、あるいは土地が開発されて街となり、ビルが建てられ、地平線はなくなっていないか。実在した風景は今や原風景になってはいないか。

そのようなことを思っていたときある著書の「あとがき」を目にした。その末尾に、「高粱畑が切れる地平線をゆらゆら揺れながら沈む雄大な北満の夕日を見つめつつ——綏芬河すいぶんがに向け北行する寝台車の車窓から——2008年初秋」と記されていた（小林英夫『満洲の歴史』講談社）。これは15年前の著書で、そのときはコウリヤン畑と夕日の景色は確かに存在していた。しかし現在人々の暮らしの中で、コウリヤンへの依存度ははるかに低下している。それは、中国の経済成長とともに

に人口1人当たりコウリヤンの生産量や食糧用途の減少を見れば明らかである。

赤い夕日のこの風景がいかにも印象的であったか、藤原作弥氏は語る。「：8時近くになって急に日が暮れはじめた。西の高梁畑は地平線まで続いていた。：平原を真赤に染めて大きな太陽が、ぐんぐん沈んでいく。高梁畑はあかね色に燃えている。僕たちは雷に打たれ、金縛りにあったように動くことができず、落日に見とれている。子供心にさえ、跪きたくなる荘厳な光景だった。僕はいまでも満洲唱歌集「夕日」を暗誦している（『満洲、少国民の戦記』新潮社）。

4年生向けの満洲唱歌「赤い夕日」である。

へー遠くの低い山々を 皆一様に
赤くして あれよ 夕日は今沈む
二はてしも知れぬ 高梁の 畑一面
を 赤くして あれよ 夕日は今沈む
三家の瓦も 木の枝も もえたつ様
に赤くして あれよ 夕日は今沈む
岩見隆夫著『敗戦 満洲追想』（原書

房）には著者の実姉による挿絵があり、当時車窓から見た夕日とコウリヤン畑の景色が描かれている。畑の手前には、農夫が荷車をひくロバに鞭をあてていて、「大連から北に向って一人で汽車に乗ったとき、見わたす限りのコウリヤン畑に、大きな夕日が沈む光景をうっとり眺めました」との説明がある。赤い夕日は満洲関係著書のタイトルや表紙のデザインにいく度も利用され、「アカシアの大連」と同じようにシンボリックである。

満洲唱歌の1曲1曲に描かれている夕日やコウリヤン畑の景色を見てみたい。以下9曲ある（曲目に添える数字は唱歌の対象学年を表わす）。

「アキー」へニシハユフヤケ アカイ
クモ ヒガシハマルイ オツキサマ
カオリヤンカッテ ヒロイナア ドツ
チヲミテモ ヒロイナア
「コウリヤンさらさら2」へーあか
いゆう日の あまあがり つゆがきら
きら ひかっている つかひのかへり
ただひとり コウリヤンさらさら ゆ
れるみち

「夕やけ2」へー ゆふやけこやけ
はたのはたの コウリヤンは なんと
せが たかいな あたまがこげるまで

「ネコヤナギ2」へー：ユフヒガハ
タケへ オチルノニ オヤネコカアサ
ン マダコナイ

「子羊4」へー：赤い夕日が 沈む
のに まだまだ子羊 帰らない…

「野っぱら4」へ三夕日あかあか
広野にしづみ 夜みちどこまで 歩い
ても歩いてても 野っぱらばかりが つづ
いてる

「駱駝の鈴5」へー 風にさらさら
高梁ゆれる 千里一目の 広野の日
暮れ 鈴が響くよ 駱駝が来るよ
喇嘛の古塔の 茜空

「月5」へーむらのこる 雨雲に
夕日の色の 消えるころ 高梁の葉に
露みえて 涼しくのぼる 夏の月

「日の出の歌6」へー彩雲たなびく
野もせのあけぼの 眼もはるかなる
高梁の はてなきかなた しづしづ昇
る…

これらから示される風景は、夕日が
雲を赤く染め、畑や広野にゆっくり沈

んでゆき、背高く伸びたコウリヤンが風にさらさらなびいている景色である。夕日が沈んだ後は夏の月が昇り、やがて東の果てに日の出を迎える。変わらぬ繰り返される大自然の営みを感じられ、荘厳ですらある。

2・2 やなぎのわたが飛ぶ風景

満洲の原風景として強い印象を与える夕日とコウリヤンの影に隠れて目立たなかったが、満洲唱歌には柳や榆をうたったものが多い。やなぎはヤナギ、柳、楊、楊柳やなぎと表記され、ネコヤナギ、どろやなぎ、絲やなぎが出てきて、やなぎ風なる形容表現を生んでいる。やなぎは庭木や街路樹、川辺の風景の中に取り込まれ、美しい春の若葉を迎えると、熟した実から綿毛をもった種子が飛び、ふわふわ空中を舞う。柳絮りゅうじよ、やなぎのわた——なんと優しい響きであるう。わたしには当時の自然環境はもとより、現在の情景に触れる機会もないが、80年、90年前と同じように現在でも、やなぎのわたしは春になれば目にする風物詩に違いない。先輩方にとっ

て、わたが舞って感じる季節の到来には、何らかの心象風景があるかもしれない。やなぎのわたしは野外だけでなく、部屋の中にまで飛んできた。やなぎの出現頻度は唱歌の13%に及び、夕日より多かった。

「やなぎのわた2」へーあをぞらと

ぶよ ふわふわわたが やなぎのわたが ひかかってひかかって とぶよ 二まどからはいる ふわふわわたが やなぎのわたが つづいてつづいてはいる 三 つくゑにのるよ ふわふわわたが やなぎのわたが こっそりこっそり のるよ 四 らうかにたまる ふわふわわたが やなぎのわたが あんなにあんなに たまる

「湯岡温泉で3」へー 此処こゝは春風 湯岡たうかう子子 やなぎなみ木が さわさわととびますとびます わたのむれ 温泉客も 見とれます

「やなぎの春5」へやなぎのわたの飛ぶころは きいろいほこりもかすみます 乗れ乗れ 小さな驢馬の上 夕日の古塔を見に出よか 奉天北稜・新市街 飛べ飛べ やなぎの毛のわたよ

ふさつき帽子をうちふるか やなぎのわたの飛ぶころは 日本のお祭り思い出す

やなぎのわたが舞うころ、東北の空には黄砂も舞う。きいろなそらや黄色いほこりと表現されていて、これもまた満洲の風物詩であろう。満洲では榆の木もよく見られた。奉天の2校の同窓会名に榆の字が宛てられていることをわたしは知っている。

2・3 ロバとともにある農村の光景

満洲唱歌にはロバ、羊、駱駝、豚、ラバ、牛、馬、犬、猫、兎などの動物が表現されている。それらの中で最も多いのがロバで、満洲の風景画にも多く登場する。ロバは従順で、朝から晩まで農民とともに働く。

ウサギウマはロバの異名である。いつも首に鈴をぶら下げていて、夜明けとともにコロンカラリンと鈴が鳴り、畑や街を行くロバの鈴の音は美しく耳に響く。のどかで穏やかな情景で、どこか懐かしい。

「ウサギウマ1」へー コロンカラ

リン コロリンカラリン ウサギウマ
オスズガナルトキ ヨガアケル ー
コロリンカラリン コロリンカラリン
ウサギウマ アカツチミチガ ヒニヒ
カル 三 コロリンカラリン コロリ
ンカラリン ウサギウマ オミミヲフ
リフリ ヒガクレル

「こうりゃんさらさら2」へーあを
いおそらに ながれくも ろばがゆく
のか すがなる 日ぐれのあぜみち
かぜのみち こうりゃんさらさら さ
びしいな

「鈴の音6」へー 床しきものよ ろ
ばの鈴 うれしきものよ 其のひぐき
わけても夏の 夕まぐれ 月まつころ
に 汝なれをきく さやけきものよ ろば
の鈴

働き者のロバは粉屋で目隠しをされ
て粉をひく。

「カラストロバ1」へー カラスガコ
ナヤニ コナカヒニ トントンカドノ
ト タタキマス コナヤノロバサン
メカクシデ イシウスヒキヒキ コナ
ツクリ ニロバサン ロバサン コ
ナハマダ ゴハンノシタクガ オクレ

マス コナハマダマダ ヒマガイル
セカストシバラク マットクレ

「こな雪3」へー こな雪さらさら
こな雪さらさら 里のこなやは日が暮
れて ろばの目かくしはずすころ こ
な雪さらさら こな雪さらさら

ロバとともに過ぐす農民と農村の風
景は今あるだろうか。ロバの荷車は車
に居場所を奪われていないだろうか。

2・4 日本にはない満洲の習俗や音
の風景

除夜から新年にかけて、華々しく爆
竹を鳴らす習慣は西欧にもあるが、日
本にはない。魔除けのこの習慣は、青
竹を焼いて爆発音を立て、鬼を追い払っ
たことに始まるという。在満の児童た
ちに爆竹の音の記憶はあるだろうか。

満洲唱歌には、パチパチ撥ねる音に驚
いて小鬼が逃げまわる様子が、面白お
かしく描かれている。

「バクチク1」へー バクチク パチ
パチパチパチ コオニガニゲル アッ
チノハウヘ ニゲル コッチノハウヘ
ニゲル ニバクチク パチパチパチ

パチ コオニガニゲル ビックリシテ
ニゲル アワテテ ニゲル

毎年旧暦4月半ば、道教の娘々廟で
行われるお祭りは娘々祭、春を告げる
うれしいお祭り、子ども、娘たち、
大人にも楽しみにされた。満洲では大
石橋近郊にある廟が最も有名で、娘々
祭には全満から数十万人もの人がやっ
てきたという。店々が立ち、笛やどら
がはやし立て、花火も打ち上げられる。
娘々祭には、「高脚踊り」が繰り出さ
れた。数十センチの高下駄を履き、派
手に隈取りされた踊り手たちがどらや
太鼓で囃され、高下駄を上手に操って
踊る。その賑わいや華やかさは観衆に
大人気であったという。高脚踊りは満
洲だけでなく、台湾、中国大陸全域で
行われた習俗である。

「娘々祭3」へー 娘々祭だ うらら
かだ 娘々祭だ お参りだ 赤い晴着
に日がさして 人ぎょうも通るよ し
ばもあるよ をどりもあるよ ー娘々
祭だ 人の波 娘々祭だ 馬車の海
わか葉 そよ風 やなぎ風 ふえも聞
える どちらも聞える 花火もあがる

「たかあしをどり2」へー ピーチャ
ンピーチャ ン ピーチャラチャ
ン ピーチャン ピーチャン ピーチャ
ン ピーチャン たかあしをどりは
チャ ン チャ ン チャ ン チャ ン
ラチャ ン チャ ン チャ ン おこつたか
ほして チャ ン チャ ン チャ ン
チャ ン にこにこがほのも チャ ン
チャ ン チャ ン チャ ン

ピーチャ ン ピーチャ ン チャ ン
チャ ン ラチャ ン は、高脚踊りの傍らで楽隊が
騒々しい音を立てている笛やどらの音
で、日本では聞くことができない。前
述の、ロバにつけられた鈴がコロリン
カラリンと鳴る音も、日本では聞くこ
とができない。娘々祭も高脚踊りも内
地の児童には馴染むことのない、満洲
の原風景である。

2・5 聞こえてくる異国語と現地での交わり

満洲には日、朝、満、漢のほか蒙古
人、回教徒、ロシア人がいた。民族別
の人口は地方地方により偏在していた
が、いずれにしても資料によれば、1
938年には総人口の93%が満漢族で、

そのうち99%以上が漢族だとされている。
児童たちの日常でも中国語を耳にするこ
とが多かったであろう、満洲唱歌の歌
詞の中にも中国語が出てくる。

「カゾヘマス2」へー ツユノイチゴ
ヲ カゾヘマス リーサンニコニコ カ
ゾヘマス 一三四カゾヘマス ココ
ハタケヨ アサノカゼ ニカゴノイ
チゴヲ カゾヘマス ワタシモイッショ
ニ カゾヘマス 一三四カゾヘマス
ナクヨクワツコウ モヤノナカ

早朝の畑の中、収穫したかごのイチ
ゴを李さんがニコニコ顔でイーアルサ
ンスーと数え、わたしはひいふうみい
ようとお手伝いする。李さんは優しく
親切な隣人だったろう、わたしにイー
アルサンスーと教えたに違いない：李
さんと児童が微笑んでいる場面が浮か
んでくる。

「洗濯4」へー かげらふゆらゆら
好天気白いかはらの あちこちで き
ぬたとんとん 洗濯 岸じゃ小豚
が ねむってる 二 小川さらさら
好天気 赤いクーツの 大姑娘 き
ぬたとんとん 洗濯 空にやお日様

てらしてゝ

うらかな春の日、揺らめく陽炎、
小豚も眠っているのどかな川原、洗濯
日和である。赤いズボンの娘さんも精
を出し、あちこちで衣類をたたいて洗っ
ている。満洲の人たちの生活が描かれ、
中国語がちりばめられている。日本の
子どもたちにとって彼らの日常に親し
みを感じさせた歌だ。

「ロシャパン1」へロシャノヲヂサン
パンウリサン 「ロシャパン ロシャ
パン」 パンウリサン ユキノフリソ
ナ ソラモヤウ 「ロシャパン ロシャ
パン」 パンウリサン シャタクウラ
ミチ ヒグレドキ

満鉄社宅の裏道をロシア人のパン売
りさんが「ロシャパン、ロシャパン」
と物売りの声をあげゆっくり通ってゆ
く。寒くうら寂しい歌詞の情景から白
系ロシア人のことなど思ったりするが、
それは大人の感傷であろう、児童たち
にとってはおなかのすく夕方近くであ
る。物売りの声のイントネーションで、
ロシアはロシャになる。パン売りさん
を通じて子どもたちはロシア人に親し

みをもっただろう。

3 日本の唱歌に見る原風景と比べる

満洲唱歌に見られる満洲の原風景は、日本の風景とどう違うのか、わたしは日本の唱歌について検証してみた。日本の唱歌は、明治末から昭和初期にかけて編纂された百数十曲よりなる『新訂 尋常小学唱歌』を選んだ。これには、紅葉、村祭り、村の鍛冶屋、冬景色、朧月夜、故郷など、よく知られた懐かしい唱歌がいっぱい詰まっている。

ここで詳述は避けるが、全体のおよそ4分の1にわが国特有の風物が描かれていた。すなわち、①農村の畑や田んぼの原風景であり、農作業や農家の生活が表現され、②それぞれが詩になる日本の四季とその趣が描かれ、とくにのどかな春の情景や秋の紅葉の美しさを愛で、③案山子、村祭、雛祭、折紙、運動会など日本の習俗・習慣に基づく風物があり、④四方海に囲まれているわが国には海の歌も見出された。

これらは日ごろ意識することなく、空気のごとく慣れ親しんでいる風物である。

主観的ではあるが日満の唱歌を比較すると、日本の唱歌の抒情性は箱庭や額縁の中の絵に見るように整った、しっかりとした情景であった。それに対して満洲唱歌にはまず広さ、大きさが感じられ、乾いていて大雑把であっさりとしていた。日満の風土が生んだそれぞれの抒情性の違いである。

しかし日本の唱歌の大きな柱は徳育教育と軍国教育にある。歴史が題材の唱歌であっても教訓的、というより教訓そのもので(たとえば「二宮金次郎」、軍国的唱歌と合わせるとこれらは全唱歌のほぼ3分の1に達する。唱歌は児童たちの情操教育が目的であるのと同じに、国力増進・国威発揚を国として、そのための教育に利用された。文部省唱歌の成り立ちそのものである。満洲唱歌の一部にも、兵隊さんや国家を意識させる曲はあり、とくに高学年向けには祖国日本との絆を忘れさせない表現がある。それは、へ日満をむ

すぶ日本の旅客機だ」と日本を讃え、

〈日本のお祭りを思い出させ〉たりへ
大君おおきみいますわが故国ふるくに〉というような歌詞で、満洲唱歌の立場に疑問を感じさせる部分がある。満洲国と日本の関係は、昭和12年盧溝橋事件勃発とその後

の日中戦争の長期化、さらに日米開戦に至る中で、共同防衛の立場にある満洲国の内地化が進められ、満洲唱歌の内地同化も進められた。しかし、満洲の児童たちには内地化した唱歌には親しめなかったに違いない。戦後になって現在になって、満洲のかつての児童たちが歌いたい唱歌は、思い出が込められた本来の満洲唱歌である。

4 満洲唱歌の曲譜に見る満洲色

喜多著には満洲唱歌の特徴について次の言及がある。「メロディーやリズムを見ても、日本の唱歌とはかなり違う。土地の音楽の要素をより多く、取り入れているのだ」。また、「そのころ、園山は精力的に満洲各地を回り、現地教師の意見を聞いたり、土地のメロ

デーの採譜を行っていた。それを参考にしながら、数多くの満洲唱歌を作曲したのである。

『満洲唱歌の父』といわれる園山民平（1887～1955）は、大正11（1922）年満洲唱歌集編集部が発足とともに内地から招かれた作曲家である。園山らが追究した『土地の音楽』とは何か。曲譜についての論議は紙上では行いにくいだが、あえてこの満洲色について考察を加えてみたい。

歌謡曲の世界では中華メロディーなるものがあり、たとえば「支那の夜」〈支那の夜 支那の夜よ 港のあかり むらさきの夜に：〉や「蘇州夜曲」〈君がみ胸に 抱かれて聞くは 夢の船唄恋の唄：〉のメロディーを挙げることができる。これらの曲は日本人による作曲なのに音の運び、リズム、装飾音符、ポルタメントの使用などによって、いかにも中華色を感じさせ、作曲者の腕に感心させられる。しかしこの中華色は明らかに上海的で、満洲を想起させない。満洲の音楽は大陸と異なり、満洲特有の曲調があるとわたしは

考えている。

満洲音楽の特徴を探していたとき、大連翻訳職業学校日本語学院2010年卒業論文（翻訳文）を見つけ、ここに中国民間音楽の特徴が論じられている。「北方の民間音楽は7音を使うことが多く、南方は5音が多い。北方は音程が比較的大きくメロディーの運動が大きい。北方はメロディーの角が多く、南方は曲がりくねる。北方は叙事性に富む」という。

わたしが知っている満洲の歌に「満洲建国歌」（高津敏・園山民平・村岡楽童作曲）〈天 地内有了新満洲：〉テイエンチーネイユウリヤオシンマンチョウがあり、高齢の日本人には知っておられる方が多いだろう。おおらか、のどか、ゆったり、こせこせしない、広い、力まない、しかしどこか抜けている、締まりがない、というような感じがあり、メロディー的には音の跳躍が多く、♪一ドードードラドミソラーソー（傍線は十六分音符。傍点はオクターブ上の音）の部分など満洲独特のにおいを感じさせる。「満洲建国歌」は前記のコメントと合致すると

ころが多く、この記述は満洲唱歌の特徴を知るうえで大きなヒントになった。

そこで満洲唱歌の全曲について調べたところ、3割近くの曲に満洲色を感じ、そのうちの8割がたに音の跳躍が多いという特徴が認められた。とくに次の3曲は、曲譜と同時に歌詞にもまた、満洲色が豊かであった。

「がん2」へー がんがいく がんがいく ひろのはての きいろなそら を かぎになり さをになり ーが ながいく がんがいく きいろなそら を とほくのくにへ さをになり かに ぎになり」

「小さな駅3」へ小さな駅に さいて いる うすむらさきの ライラック 赤い服着た しの子が にこにこ顔 で ながめてる うすむらさきよ さやうなら にこにこ顔よ さやうなら」

「洗濯裳4」へ既出」
音の跳躍以外に八分音符の連なるメロディーなど、満洲色に関わると思われる特徴も見出されるが、主観的なことでもあり詳述は避ける。いずれにせよ満洲唱歌に土地の音楽を感じさせる

要因には、これら曲譜上の特徴も加わっている。

なお日満の唱歌の曲譜上で、日本の唱歌には馴染みが深いピョンコ節が満洲唱歌にはなかったことは大きな違いである。明治以来の歴史と伝統を引きずっている日本の唱歌に対して、満洲唱歌にはそれが無いことによる（ピョンコ節とは、たとえば「鉄道唱歌」へ汽笛一声新橋を）に見られる跳びはねるような繰り返しのリズム）。

おわりに

かつて満洲に居住した多くの人が、あの頃はみんな満洲の人たちとも仲よく暮らしていたという。もちろん同時に、土地を収奪された人だけでなく、満洲の人々が外来者に対して心を開かなかった例はたくさんある。一方で、のちに多くの中国残留孤児を生むことになるその事実も、多くの場合、気のない日本人避難民を助けようとした、満洲の人たちの人道による。国家と違って個人は、家族愛から隣人愛へと心の

つながりを広げる。

満洲唱歌の中にあるもの、それは満洲の大地、赤い夕日に輝く広いコウリヤン畑、柳がそよぎロバがのんびり歩く光景、満洲の習俗や異国情緒、厳しい寒さのなか白い息を吐いてスケートに興じる子どもたち、一二三四と聞こえてくる李さんの声、である。満洲唱歌が在満児童用に作られたとしても、唱歌に描かれるこれらの情景は、日本人にも満洲人にも共通の、残しておきたい原風景である。児童たちの歌声には、国家も国家権力もなかった。満洲唱歌は消えていっても、満洲の原風景は忘れ去りたくない。

資料

- (1) 本稿で対象とした満洲唱歌は復刻版『満洲小学唱歌集』謙光社（昭和48年）収録、小学校1〜6年用の69曲で、高等小学校向けその他は除外した。
- (2) 喜多由浩著『満洲唱歌よ、もう一度』扶桑社（2003年）



復刻版『満洲小学唱歌集』